

マッチスティックメン (MATCHSTICK MEN)

2004(平成16)年1月7日鑑賞(ホクテンザ)

★★★★



監督＝リドリー・スコット／脚本＝ニコラス・グリフィン&テッド・グリフィン／出演＝ニコラス・ケイジ／サム・ロックウェル／アリソン・ローマン／ブルース・アルトマン／ブルース・マギル／シーラ・ケリー (ワーナー・ブラザーズ映画配給／2003年アメリカ映画／116分)

……天才的な詐欺師で自称詐欺アーティストのロイは、「潔癖症」というヘンな病気もち。その前に現れたのが離婚した妻との間に生まれた、今は14歳となった娘のアンジェラ。一世一代の詐欺に挑んだロイは大成功をおさめたが、一挙に形勢逆転……。詐欺師だって、たまには騙されることも……？

🎬 窃盗、詐欺、背任、横領——刑法のお勉強

窃盗罪(刑法235条)、詐欺罪(同246条)、背任罪(同247条)、横領罪(同252条)はすべて日本の現在の刑法上の典型的な「財産犯」だが、その行為の態様(構成要件該当性)はそれぞれ厳格に区別されている。すなわち、

- 1、窃盗罪は、他人の占有している財物を占有者の意思によらないで取る犯罪
- 2、詐欺罪は、他人を欺罔して財物をだまし取る犯罪
- 3、背任罪は、他人のためにその事務を処理する者が、自己もしくは第三者の利益を図り、または本人に財産上の損害を加える目的をもって、その任務に背いた行為をなし、本人に財産上の損害を加える犯罪
- 4、横領罪は、自己の占有する他人の物を領得する犯罪

のこと。これらの財産犯の特徴を比較すると、窃盗罪は素朴な犯罪であるのに対して、詐欺罪は知能犯的であり、より洗練された財産犯だ。

他方、これらの犯罪の法定刑は、窃盗罪、詐欺罪が10年以下の懲役刑であるのに対し、背任罪と横領罪は5年以下の懲役刑と定められている。

背任罪と横領罪は、「自己の支配内にある他人の財物の領得」であり、「他人の

支配を排斥して実行する領得」である。窃盗罪や詐欺罪と比較して、「形態において平和的であり、動機において誘惑的である」（滝川・刑法講義、滝川・「欺罔手段と横領罪」）ために「横領罪が窃盗罪よりも軽く罰せられる」こととなっている。他方、詐欺罪は、経済取引の中に組み込まれることによって、窃盗罪よりもはるかに大きな害悪を流しており、この意味において詐欺罪はまさに近代的な犯罪というべきだ。以上の坂和流刑法（財産犯）の講義を前提に、詐欺アーティスト、ロイ・ウォラー（ニコラス・ケイジ）を主人公としたこの映画を評論しよう。

詐欺師の各種パーソナリティ

上記のとおり、古来、「詐欺は動機において誘惑的な」犯罪だ。また詐欺の実行者は、かなり高度な知能レベルの人間でなければならない。もちろん、そうでない人間が犯す詐欺事件もたくさんあるが、そういう事件では当然ながら犯人はすぐに捕まってしまう。しかし世の中には歴史に残る詐欺師がたくさんいる。

種村季弘著『ペてん師列伝』（2003年・岩波現代文庫）は、西欧の実話にもとづく著名ペてん師を著者なりの視点で分析したもので、興味深い。さらにサブタイトルが、「あるいは制服の研究」とされているのが面白い。つまり、「制服は人を惹きつける。体制が保証した地位や職階の証しにおびき寄せられる。ドイツ軍大尉、プロイセン王子、ザクセン選帝侯太子、軽騎兵将校などと思わせると、俗者どもは喜んで金品を差し出し、ペてん師たちは容赦なく巻き上げる。大笑いののちにハタとわが身を振り返らざるをえない」ということだ。

カッコいいペてん師の映画版は、何といてもパイロットの制服を着こなし、美人スチュワーデスを従えて、さっそうと詐欺を行なう、若くてハンサムな、レオナルド・ディカプリオが主演した、『キャッチ・ミー・イフ・ユー・キャン』（03年）。この主人公はパイロットだけではなく、医師、弁護士などに扮し、16歳の時からアメリカ50州を振り出しに、世界26カ国で偽造小切手約250万ドルを現金化したという実在の天才詐欺師だ。日本映画では何といても、織田裕二が主演した、『TRY』（03年）。これは20世紀初頭、革命前夜の中国で、日本陸軍が上海に運びこむ武器をそっくりいただくという度肝を抜くペテンをしかけ、見事に大成功させるというエンターテインメント巨編。ペテンもここまでくるとすごい

もので、一種の快感だ。本作の主人公、ロイ・ウォラーは……？

ロイは潔癖症の病気持ち

この映画に登場する天才的詐欺師ロイ・ウォラーは、自分の「職業」を詐欺師とは言わず、「詐欺アーティスト」と称している。それは暴力を決して使わないうえ、金を騙し取るのではなく、相手から払ってもらおうというスタイルを貫いているという「自負心」があるからだ。そして、こんなロイは「潔癖症」の病気持ち。それもかなり重傷だ。そしてこの潔癖症の原因は、どうも別れた妻との間の問題が背景にあるらしい。仕事の相棒のフランク（サム・ロックウェル）の勧めに従って、病気の治療のために精神分析医クライン（ブルース・アルトマン）の治療を受けているうち、そんなロイの潔癖症の原因が少しずつわかってきた。別れた妻は妊娠していた。そんな妻を殴ったため妻は家を飛び出していき、それっきり。もし子供が生まれていたら今頃は……？ そんな治療を受けているうち、ロイの心には娘に会ってみたいという気持ちが芽生えてきた。

14歳の娘、アンジェラの登場

ロイは、ついにある日、別れた妻に内緒で、今は14歳となっている娘アンジェラとはじめて会った。この14歳のアンジェラ役を演ずるのは、24歳のアリソン・ローマン。小柄だし、服装その他によって、何ともうまく「化ける」ものだ。そしてまた何よりも演技力によって彼女はすばらしく14歳のアンジェラ役にはまっている。このアンジェラの登場によって、ロイの生活は一変した。カーペットのシミひとつにも、プールの中の落ち葉ひとつにも、敏感に反応していた潔癖症のロイの家の中は、アンジェラの出入りによってメチャメチャ。しかしなぜかロイはそれを拒否せず、逆に楽しげに、このアンジェラの天衣無縫なキャラと行動を受け入れた。そう、明らかにロイの人格は変化し、またロイの潔癖症の症状も変化していたのだった。

血筋は争えない？ 詐欺師の娘は詐欺師？

アンジェラは勝手に家の中を調べまわり、当然のように「お父さんのお仕事

は？」と聞いてきた。ロイがやむをえず「詐欺アーティスト」だと答えると、何とアンジェラは興味を示し、「仕事のやり方」を教えてくれとせがんできた。そして……。血筋は争えないもの。何とアンジェラは、「はじめて」の「仕事」にもかかわらず、堂々たる詐欺師ぶりを発揮したのだった。そこでロイは相棒フランクの勧めを受け入れ、こんなアンジェラを巻き込み、金持ちのチャック（ブルース・マッギル）から、大金をせしめる一世一代の詐欺の実行を決意した。

結果は大成功、しかし……

このデカイヤマは大成功……と思った時、わずかな計画の狂いから、ロイらはチャックの追及を受けることに……。何とかその追及を逃れたと思ったのもつかの間、ある日家に帰ったロイとアンジェラは、相棒のフランクを殴りつけてソファの上にどっかりと座っているチャックと「ご対面」することとなってしまった。

しかしそこから事態は急展開。何と、ロイが隠していた小型拳銃で、アンジェラがチャックを撃ってしまったのだ。14歳の娘による殺人（未遂）事件……。ロイは必死に手を尽くして、アンジェラをフランクの運転する車で逃走させ、自分は家の中に戻ったが、そこで瀕死の重傷のはずのチャックに頭を一撃され、失神してしまった。そしてついにロイは逮捕され、警察の尋問を受けることに……。

予想もつかないドンデン返しの大ペテン

この映画が面白いのはここからだ。警察に追及されながらも、必死にアンジェラをかばうロイ。しかし拳銃には小さな指紋がついていたと指摘され、万事休す。ところが傷が少し回復し、ベッドから立ち上がると、そこは警察署の中のはずなのに、警察官が誰もいない。おかしいと思って外に出てみると、何とロイが収容されていたベッドは、プレハブ小屋の中にセットされたものだった。これは一体どういうことだ……？

いくら何でも、これ以上書いたら読者から怒られてしまうので、私の説明は以上で終了。皆さん、天才詐欺師のペテンぶりをよ〜く考えてみよう。そして見事に騙される自分を大いに楽しむことがこの映画製作者や役者たちへの最大の讃辞になるだろう。

2004(平成16)年1月8日記